

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281
e-mail: blrhgy@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhgy.org/>



所長の諏訪山だより

新天皇の即位にあたって思うこと

5月1日、新天皇が即位した。マスメディアは祝賀ムード一色で、天皇制に対する疑義はあるか、天皇の在位期間によって時代が区切られるという元号への異論さえ出てこない。天皇制は廃止すべきだという反天皇制の主張は、すっかり後退してしまったようだ。

これまでの反天皇制の主張は、主として天皇の戦争責任論と、生まれによって地位が決定されるという世襲制の問題点（貴あれば賤あり）を根拠としたが、戦争責任については、新天皇は戦後生まれで、前天皇も敗戦時には小学生であったわけで、議論が成立しづらい。また、世襲制の問題点についても、新天皇や前天皇に対する国民の好感の大きさを前にしては、天皇制廃止の根拠としての説得力は弱いように思われる。

周知のように、新皇后は元外交官であり、婚約会見では自分のこれまでのキャリアを生かして皇太子妃としての務めを果たしたいと述べたが、男子出産を望む圧力に加え、2003年の適応障害発症とその療養のため、公務での海外訪問は7回にとどまっている（現天皇の皇太子時代の公務での海外訪問は43回）。それだけではない。昼夜逆転した生活を送っているとか、友人と外食に出かけたとか、週刊誌などによるバッシングも後を絶たない。それもあって、新皇后の体調の回復は、未だに思わしくない。現在、未婚の男性皇族は一人だけだが、将来の結婚を考えると、その相手となる女性は、新皇后と同じような苦労を味わう可能性が高い。それだけではなく、男子出産を望むプレッシャーは、新皇后のときよりもさらに強まるであろう。

いうまでもないが、天皇と皇族には職業選択の自由も居住の自由もない。参政権もなければ、表現の自由も、信仰の自由もない。そもそも天皇と皇族は、自分の意思で天皇・皇族をやめることはできないのである（皇室典範第11条には、皇太子と皇太孫を除く皇族は、「やむを得ない特別の事由があるときは、皇室会議の議により、皇族の身分を離れる」ことができるとあるが、現実的にはありえないであろう）。こうした人権のかけらもない窮屈な生活をあたかも宿命として天皇と皇族に強いづづけることが本当によいのだろうか。

天皇と皇族の人権を考えるならば、これからの日本は天皇制を廃して、共和制国家として新しいスタートを切ったほうがいいのではないか。新天皇や前天皇、そして皇族に対する国民の好感が非常に大きい現在だからこそ、天皇と皇族の人権という視点は、天皇制をなくしていく展望を開いていくことにつながるといえる。

所長 石元清英



まんがのすゝめ

『逢沢りく』 (上・下)

作:ほしよこ、文藝春秋、2014年10月、各1000円+税

ソウルに行くと、必ず光化門にある大型書店・教保文庫に行く。ここは本だけではなく、デザイン性の高いしゃれた雑貨や文具、音楽CD類も充実していて、とても楽しい。

昨年(2018年)の11月に訪れた際、平積みされた本をわくわくしながら眺めていて、あることに気がついた。韓国は漢字表記が殆ど無く、本のタイトルや著者名もほぼハングルで表記されているので、ぱっと見たところはわからないのだが、目を凝らして一文字ずつ読んでみると、どれもこれも日本の作家のものばかり。小説に留まらず、社会、ビジネス、絵本や料理本まで、ありとあらゆる日本の翻訳本がずらりと並んでいるではないか。

教保文庫が発表した2018年の書籍販売調査(小説分野)では、日本人作家が書いた小説のシェアが31.0%となり、29.9%の韓国小説を初めて逆転し、首位になったという(とりわけ東野圭吾が人気らしい)。「韓国人は日本が嫌い」と思い込んでいるネトウヨ諸氏はぜひとも韓国書店に足を運んでみて欲しい。日本の文化がこれほどまでに浸透し、受け入れられていることを実感するはずだから。

さて、『逢沢りく』を知ったのは、筆者が教保文庫で真っ先に新刊を探す大好きな絵本作家、ペク・ヒナのブログだった(ペク・ヒナについては、いつかどこかで紹介したい)。彼女は日本の漫画の大ファンで、一仕事終了後ご褒美として、日本の漫画を大量に購入し一気に読みすることが楽しみだという。そんなペク・ヒナセレクトの中に韓国語に翻訳された本書があった。話題になった漫画なので、その存在を知ってはいたが、絵も、台詞も、仕切り線まですべて鉛筆書きなので、なんとなく読みにくそうで、食指が進まずにいた。だが、ペク・ヒナのブログに書かれたこの本の感想を読み、すぐさまアマゾンで注文をした。「見事だ」とただひと言。これは読まずにいられない。

主人公の逢沢りくは14歳の中学生。美しい少女は独特のオーラを放ち、周りからも一目おかれる存在で、本人もそのことをよく知っていた。彼女は悲しみの意味を知らなかったけれど、まるで蛇口をちょっとひねるように、涙をこぼすことができた。東京で「ステキ」なパパとママの3人で暮らすりくは、パパが会社の若いアルバイトの女性と浮気をしていることに気づいていたし、ママの自己実現のため、自分が振り回されていることも知っていた。そんなある日、りくはママから「仕事に集中したいから、大阪にいる親戚の家でしばらく暮らしてほしい」と切り出される。

まるで異次元の人のように感じられ、毛嫌いしている「関西人」の家での、関西弁にまみれた騒々しい暮らし。考えただけでぞっとするりくだったが、そこでの暮らしを通して、はじめて本当の涙の辛さと苦しさ、そして、その温もりを知るようになる――。

パラパラめくると、ノートに走り書きした落書きか?とってしまうが、読み進めるうち、そこに描かれた繊細な感情表現や、状況描写の力に圧倒される。それこそペク・ヒナの感想そのままに「見事だ」としか言いようがない。

自分の殻に閉じ込めてしまった思いが、堰を切ったようにあふれだすラストシーンは、本のキャッチそのままに、涙があふれて止まらない。(Ko)





本の紹介

『限界の現代史—イスラームが破壊する欺瞞の世界秩序』

内藤正典著、集英社新書、2018年10月、860円＋税

「いますぐに私たちを助けてください」——2016年9月、シリア北部の反体制派が立てこもるアレッポで政府軍の攻撃が激しくなる中、7歳の少女バナが英語で発するツイートを、彼女が12月に無事トルコに脱出するまでリアルタイムで見ている。彼女のツイートは世界各国で反響を呼び、日本でもテレビや新聞で紹介され、本も翻訳出版（『バナの戦争』飛鳥新社、2017年12月）されたので、知っている人も多いだろう。



シリアがどうしてそんなことになっているのか、自国民の頭上に爆弾を落とし続け、500万人を超える人びとが難民として国外に逃れるような事態を起こしているアサド政権をなぜ誰も止められないのか。シリアだけではない。イエメン、南スーダンなどでの虐殺や弾圧、ミャンマーのロヒンギャへの迫害と虐殺……。そこから逃れるおびただしい数の難民。繰り返して起こる「テロ」。そうした事態に国連は有効に対処できているようには見えない。「自由・平等・人権」を掲げてきたヨーロッパでは、難民排斥を掲げる政党が躍進している。

世界は大きく揺れ動いているように見えるけれど、日本でぼんやり生きてると何がどうなっているかよくわからない。そこに会ったのが本書だ。著者は1980年代前半にシリア、90年代前半にトルコに留学し、ヨーロッパ各国で移民たちと対話を重ねながら40年近く中東とヨーロッパ、イスラーム地域を見てきた研究者。歴史を縦軸、地理を横軸に、西洋啓蒙思想・国民国家・国連の「限界」、「第二次大戦後の世界の安定を担ってきたシステムと秩序の崩壊という現実」を浮き彫りにする。

難民の排斥やムスリムへの差別的な主張をしているのは「極右」や「民族主義者」ではなく、「リベラル」を標榜する政治家なのだと言著者は言う。自分たちが「普遍的だ」と信じる価値を受け入れないイスラームは自由や民主主義にとって敵だ、そのイスラームを信じるムスリムを排除して何が悪い、という理屈で、それに共鳴する市民は驚くほど多いのだ、と。それが、ここ数年シリアなどから戦禍を逃れてヨーロッパに向かった100万人を超える「難民」の存在があぶり出した、ヨーロッパの「もう一つの顔」だ。

「国民国家」という枠組みも揺らぎ始めている。そもそも「国境で区切られた領域」「国民」「主権」の3要素を基礎としたこの概念は、18世紀のヨーロッパで生まれたもので、中東のイスラームを含めた「世界共通の普遍的な概念」ではない。「主権国家」の集まりである国連も、紛争や戦争の問題を解決するために存在するはずの安保理が「大国が多数派工作を通じて自分たちの意向を通す場」となってしまう、全く機能していない。

ではどうすればいいのか。「お互いのパラダイムの違いを認め、相手を力で征服することをやめる」敵対的共存が必要、と著者は強調する。その例として、ロシアとトルコの関係をあげている。イスラーム的正義を追求するトルコのエルドアン大統領のことにも一定の頁が割かれているが、ここでは一つだけ挙げておきたい。欧米などから強権的な手法を批判されるエルドアン大統領だが、シリアやガザ、ロヒンギャ問題など、「領域国民国家」の中で抑圧されている人たちに手を差し伸べている。ヨーロッパ全体の3倍、300万人の難民を受け入れながら、トルコ国内では難民排斥運動が起きていないという事実は、ほとんど知られていないのではないだろうか。

日本に住む私たちはどうしたらよいのかについても、「終章 帝国の狭間で」で考察されている。

予備知識のない者にとっては少し骨の折れる本だが、「イスラームを通して世界を見る」ことで世界の別の姿が見えてくるし、自分自身のものの見方も揺さぶられる。特に、これからを生きる若い人たちにはぜひとも手に取ってほしいと思う。(H)

2019年度『人権セミナー』

第1回「メディアとジェンダー」

■講師：石元清英（ひょうご部落解放・人権研究所所長）

■日時：2019年5月18日（土）13：00～15：00

■場所：兵庫県立のじぎく会館ふれあいルーム

■参加資料代：【一般】800円 【会員・定期購読者・学生】500円

もともと「文法上の性」（ドイツ語やフランス語などの女性名詞、男性名詞等）の意味しかなかったジェンダー（gender）という英単語に「社会的・文化的につくられた女らしさ・男らしさ」という新たな意味が付け加えられ、使われ始めたのが1960年代半ばのことです。このジェンダー概念の登場によって、それまで運命的・宿命的なものとなみなされていた性差が社会的につくられたものであり、自分たちの力で変えていくことができるものであることが明らかになってきました。それと同時に、社会の制度や慣習、伝統などといわれるものも、男性中心社会のなかで都合よくつくられてきたものであることがみえてきました。

本セミナーでは、日常生活で接しているマスメディアを取り上げ、ジェンダーの視点から何が見えてくるのか、考えます。

第2回「部落問題と向き合う若者たち」

■日時：7月20日（土）14：00～16：00

■講師：内田龍史さん（関西大学教授）

■場所：のじぎく会館ふれあいルーム

第3回「被差別部落と結婚差別」

■日時：9月28日（土）14：00～16：00

■講師：齋藤直子さん

（大阪市立大学人権問題研究センター
特任准教授）

■場所：のじぎく会館ふれあいルーム

第4回「メディアと人権」

■日時・場所：未定

■講師：戸田栄さん（毎日新聞記者）
平井啓三さん（NHK記者）

※日時・場所は決まり次第 HP でお知らせします。

第5回「部落の所在地を問うこと、伝えることがすべて差別なのか」

■日時：2020年1月25日（土）
14：00～16：00

■講師：細田勉さん

（部落解放同盟兵庫県連合会副委員長）

住田一郎さん

（部落解放同盟住吉支部員）

■場所：のじぎく会館 201 号室

○申込・問合せ

ひょうご部落解放・人権研究所

TEL：078-252-8280

mail：blrhyg@extra.ocn.ne.jp

事務局から

- 連休中は韓国ドラマの名作にどっぷり浸った。「未生」「グッド・ドクター」そして「ディア・マイ・フレンズ」。どの作品も見終わるのが惜しいくらい素晴らしかった。あ～幸せ。(K)
- 父が亡くなったのは晩秋。その冬の暗くて寂しい気候が、悲しみで沈んだ気持ちと重なり合って、なんだか楽だったことを思い出す。生命の芽吹く5月は好きだけど、辛い日々を過ごす人にはしんどい季節かもと思ったりする。(H)
- 4月より職員が1人減りました。資料の整理もしてもらっていたので、さっそく未整理資料が増殖中です。放っておくと大混乱になるので、早く手を付けねばと焦っています。(Ka)
- 王子公園で、週3日だけ営業しているパン屋さんを見つけました。巷で話題の食パン専門店のように「もちもち」「甘い」食パンではないですが、丁寧につくられた素朴な食パン、その名も『やっくとトースト』にハマっています♡(ひ)